

魔道騎士 エア デル

榊原
晴



#1 聖竜騎士の弟子

国境付近にある渓谷の砦跡で、一人の聖竜騎士とその三人の弟子たちが修行をしていた。しかし、ある日突然、聖竜騎士の身体に激痛が襲いかかった。

「ははは...ギックリ腰なんて情けない」

聖竜騎士ギルは申し訳ないように頭をかいた。食卓の椅子に、いくつものクッションに食い込むように座る師匠を、弟子の三人が取り囲んでいた。修行場では治療が出来ないので、ギルの実家に一同は集まっていたのだ。

「やー私も初めてだったので、びっくりしたよ。それはともかく。私の名代頼んだぞ、リカルド」ギルは一番弟子の青年に話しかける。明るい麦わらの髪の涼しげな瞳をした精悍な青年だ。

「はい。騎士としての勤め果たして参ります」

すかさず、隣に座っていた一番年下の十才程の少年が「おとなりのルーシェンは風光明媚で、食べ物が美味しくて、暖かい国なんだよね～いいなあ～」と、うらやましそうにつぶやいた。

「魔道士が魔法で気候を暖かくしているような、魔法だらけの国だぞ。観光しに行くんじゃないからな。フリン」リカルドが呆れて答えた。しかしもう1人の少年の表情が冴えなかった。炎のように赤い髪をした美しい十五、六才の少年だ。

「ねーアデル。お土産なんかじゃつままないよね」フリンはその少年の顔を覗き込んだ。

「別に、オレも一緒に行きたかったわけじゃ...」アデルはちらりとリカルドの方を見た。

「何だ？ お前も行きたかったのか？」ギルはあきれて首を横ふった。

「アデルはまだお師匠（マスター）のそばにいられるからいいよ。僕なんかアカデミーでお勉強だよ」フリンが膨れ面をしているものだから、リカルドは少しイライラして「みっちり詰め込んでもらえ」とデコピンした。

「肝心の壮行会はどうなっているの？ ごちそうが冷めちゃうよ。いいから席についておくれ」ギルの母が両手を広げてやれやれといった感じであきれたのを見て、ギルが咳払いした。

「聖竜さまに感謝の祈りを」と両手を組むと、弟子たちは食事を前に神妙な顔をして両手を組み黙祷した。

大陸から海によって隔たれたフレイ島を統べるウラル聖竜王国は、三つの公国から選出された聖竜騎士が統治する選王制の国である。

かつて三つの公国には、その覇権を巡った戦乱時代があったが、千年程前に聖竜騎士であった聖王ウラルによって統一され平定した。

聖竜騎士は聖王ウラルを始祖としたウラル教の、司祭でもあり、騎士でもあり、聖竜魔法の術士でもあった。各公国から資質のある子供が選ばれ、幼少から結界を張った修行場でしきたりにのっとり特別に育成されていた。

ギルの弟子の三人も、各公国からえり抜かれた子供たちだった。そのうちの1人、年長のリカルドは既に騎士となっており、そろそろ独り立ちする年頃になっていた。

夜の帳が落ち人々が眠りに付いた頃、アデルは出窓から夜空を眺めていた。

「そういえば、ルーシェン公国って、リカルドは初めてだよな？ ...食べ物美味しく暖かい国ってやっぱり暮らしやすいのかな...」そんな事を考えていたら横に白い竜翼が近づいてきた。

《砦跡まで競争しないか？》

アデルは小さくうなずくと胸に手をあてて竜の姿に変身した。流れる雲を追いかける、二匹の竜のシルエットが夜空に浮かび上がる。溪谷を抜けて、小さい砦後に舞い降りると二人は人の形にもどった。かなり本気で飛んで来たので、息も切れ切れだ。

「.....半時ぐらい？ まあまあの早さかな」

「.....飛ばしすぎだぞ。アデル」

「.....リカルドがのろいのさ」リカルドはやれやれとした顔をして、水を飲んだ。その姿を眩しく感じながらアデルは見つめていた。

兄弟子のリカルドは、痩せているのにしっかりとした身体をしていた。その、自然に鍛えられた腹筋や背筋を見るとつい、いつも見とれてしまう。自分もそのような身体になればいいのにと、密かに願っていたのである。リカルドはアデルの視線に気がついた。

「そういえば、途中、振り返っていたが何か気になったのか」

アデルはちょっと躊躇って「このまま、頑張っ飛ばせば、海を越えて大陸に行けそうかなって」と、言うとりカルドの顔色が曇った。

「オレら竜人（ドラゴニユート）は聖竜の祝福を受けた水が溢れるこの島でなければ長くは生きてはいけない...」リカルドは首を横にふって答えた。

「わかっているよ。ただ...」アデルが口を尖らせて、膝を抱えて右手の爪を噛もうとすると、リカルドはよくない癖とばかりその手を取り上げたので、アデルはドキッとして手を引いた。

フレイ島に住む彼らには、大陸の人々に知られてはならない秘密があった。人と外見こそ変わらないものの...彼らには竜の血が流れている。そして、その竜の血こそ彼らの魔力の源である事を。

「そのうち...こうやってお前と一緒に空を飛べなくなるのが残念だ」砦跡のテラスからリカルドは空を仰いでいた。

「こっちは清々しているから」アデルが少し意地悪に答えると、リカルドは小さく笑った。彼の胸元の聖石が月明かりに青白く反射する。

「騎士の証.....」

この才能ある兄弟子はいずれ独立して聖竜騎士に序列をされるだろう。そう遠くない日に。アデルはため息まじりにリカルドの胸元の聖石を見つめた。

この古い砦跡は、つい先日まで彼らの修行の場だった。

ギルが忙しかったので、アデルの修行の多くはリカルドが面倒を見ていた。聖竜騎士となるための剣術、聖竜魔法や神学や医術などの学問。リカルドは師匠としては厳しく、気を抜くことが

なかった。アデルは、はじめそんなリカルドが気に入らず、何度も修行の場であるここから抜け出そうとして捕まった。その度、水汲みや書き取りや夕食ぬきの罰を与えられたのだが。

しかし、リカルドは厳しいだけの兄弟子ではなかった。空腹に絶えきれず...夜中潜んで台所に行く、残ったパンで作ったサンドウィッチがわかるように隠されていたり、寒い夜に毛布の中で震えていると、そっともう一枚毛布をかけてくれたり。手の豆を潰して処理をするのが面倒で、放っておいた時にはものすごく叱られたものの、薬をぬって処置してくれた時、その手は優しく暖かくて大きかった。孤児だったアデルは、これまでこんな風に誰かを暖かいと感じた事はなかった。それ以来、二度と砦跡から抜け出そうと考える事はしなくなった。

次第に、アデルはリカルドにいたずらするのが楽しくなった。笑ったり、怒ったり、叱られたり、泣いたりして日々をすごしているうちに...アデルはリカルドを兄のように慕うようになった。しかし、リカルドが騎士の証を賜り、いずれ独り立ちして別々になるとわかった時には寂しくてたまらなくなった。だからもう...これ以上リカルドと深い関わりを持つのをやめようと考えていた。別れがもっと辛くなるから。

「帰るぞ」

リカルドはアデルの頭をなでた。アデルはうなずくと、やっぱり暖かくて大きな手だと思った。

#2 誘惑されて

次の日の朝、リカルドがルーシェンに旅たったのを見送った後、アデルは聖都の宮殿に足を踏み入れた。王宛のギルの手紙を宰相に渡しに行く為である。

少し緊張しながら、ドアごとに立っている近衛騎士の壮麗で派手な甲冑に見とれながら宮使いの後をついていくと、その先に宰相の執務室があった。ギルの兄弟子であった宰相バースには面識があったので、馴染みのあるそのにこやかな顔を見た時アデルは少しほっとした。

「ずいぶん背がのびたな。おちびちゃん」バースは三十代後半の立派なヒゲのある貫禄ある男だった。

「いつまでも子供扱いしないでください」アデルは口を尖らせて一礼すると、ギルの手紙を渡した。宰相は笑いながら受け取った。その時、執務室の奥の窓辺にもう一人、男が立っていたのに気がついた。アデルは即座に身構えたが...王宮の入り口に剣を預けてあるのを思い出した。

「警戒する事はない」宰相はアデルの身構えを制した。逆光で最初は誰かわからなかったが...その男の顔には見覚えがあった。

「やれやれ。弟子のお使いをよこすとは。ギルの具合は相変わらずということか...」

「ギュスタ王...し、失礼いたしました」アデルはあたふたと膝をついてうやうやしく挨拶した。

「私はアデルと申します。本日はギルの名代で参りました」

「よい反応だな...流石はギルの弟子と言うべきか。面を上げなさい」アデルが顔を上げると王が驚き息をのんだ。そして近づき、頭からつま先まで舐めるようにまじまじと眺めた。アデルは少し嫌な感じがしたが...表情には出さなかった。

「彼はまだ年少ですが、もうじき騎士の証を授かる実力の持ち主です」空気を読んだ宰相は二人の間にわって入った。

「左様か。それにしても、炎の如く...赤い髪だ。それでは必要以上に目立ってしまうであろう」王はつぶやくと部屋を出て行ってしまった。

「よくおいでになるのだよ。ここからの眺めがお好きなのだ」バースは王の後ろ姿を視線で追った。

ギルの私邸に戻り、アデルはギルに王と会った話しをした。

「それはよかったな。一介の騎士でもなかなか声をかけて頂けないのだからな...ん？ あまり嬉しそうではないが」

「その、気配が読めませんでした」アデルが少し元気のないのを見て、ギルは笑いながら「お前のような半人前では無理もなかろう」と受け流した。

『オレを見た時のあの目が...嫌な感じだったなんて言えない』アデルはうつむいた。

次の日、朝早く王宮から使いがギルの元へやって来るなり、台所を手伝っていたアデルが呼ばれた。

「王がお前を従士として召し抱えたいとおっしゃっている」ギルの言葉にアデルは驚いた。突然

の事に驚いたのもあったが、昨日の王の目つきを思い出し...嫌な予感がしたので、断りたいとギルに伝えた。

しかし、結局アデルは宮殿に登城して控えの間にいた。ギルがとても嬉しそうだったので来るのを拒めなかったからである。

「おまえならいずれ聖竜騎士にはなれるだろうが、若くして王の側付きになれるのであればそのほうが良い」ギルの言う事はもっともなのだが。アデルは困惑していた。

「すぐにでも参上せよとの思し召しだ。何を心配している？ なに、お前にはそれだけの才覚がある。大丈夫だ」ギルは背中を押すのだが、自分の事だけを思い悩んでいるのではない...王の従士であれば王宮に駐在することとなる。皆と離ればなれになる。そうなるのが嫌だと思ったからだ。

宮使いに呼ばれてはっとしたアデルは、小さな...それでも部屋としては充分大きな部屋に通された。

「もともとここは物置だったのだが。私にはこのくらいの広さが一番落ち着く...どうだ？」王はソファに座ってワインを飲んでいるようだった。かつては国中に名を轟かせた剣聖で立派な身体をした男だが、どこか、繊細な感じをしているように見えた。

「御意にございます」アデルは萎縮していた。

「お前の感想を聞いている」

「悪くない部屋だと.....。ただ」

「ただ？」

「風向きによって調理室から美味しい匂いが漂っていますので...お腹がすきそうです」

王はワインを吹きそうになりながら笑った。

「美味しい匂い。結構じゃないか」アデルは初めて会った時と印象がだいぶ違う感じがした。

「いや、しかしそれではロマンチックではないな。大失敗だ」

「と、申しますと？」

「...ここでお前とランデブーするつもりでいた」王はグラスを傾けて微笑んだ。

「ご冗談を」アデルは困って愛想笑いをすると、王はアデルの右手を取り手の甲にそっとキスした。アデルは全身の筋肉が収縮して緊張するのを感じた。

「お前は美しい...我がものとなれ。アデル」

時々リカドが自分を見つめるような目つきだとアデルは思った。だけど、自分はこの人を知らない...いや、ずっと前から知ってはいたけど、話したのは昨日が初めてで。王はアデルのほほに手を添え、キスを促すような仕草をしたので、おもわず顔を背けてしまった。

「ご命令でしょうか？ それとも、これが従士として仕えるための条件でしょうか？」うなだれながら、たどたどしくつぶやくのが精一杯だった。

「ふうむ。不服そうだな」

「いえ、そんなつもりでは」失礼な事を言ってしまったと後悔した。

「では言い方を変えよう。我がものとなって、私を愛して欲しい...」そして抱きしめられた。

「おなさら困ります。わ、私には」好きな人がいる...と、言いそうになってアデルはあわてて口をつぐんだ。リカルドの顔が浮かんだからだ。アデルは自分の気持ちに動揺した。

「王よ、こちらにおいでですか？」その時、部屋の外から宰相バースの声が聞こえた。

アデルはバースの家臣に連れられてギルの私邸に戻ってきていた。

「すまなかったな。あの方がかつて無類の好色だったのは知っていたが、まさか子供のお前まで」ギルは困惑しているようだった。

「宰相閣下が来てくれなかったら...オレ、どうなっていたか」アデルは緊張の糸が切れて少しぐったりしてしまった。

「ふーむ。それにしても、ご結婚されてからこの十数年、病気は治まったものとはばかり」

「お妃様がおられたのですか？」

「病弱で公式行事には一切顔をだされない。式の時に遠目で一度拝見したことがあるが。そう、お前のように赤い髪だったが」

夕食後の片付けが終わり、アデルは、夜空の流れる雲を見つめていた。リカルドが出かけてまだ2日しか経っていないに、いろんな事があった。

リカルドは、ギルの代わりに、竜となってしまった竜人を捕縛に行っただけなのに。ずっと戻って来なかったらと思うと心配でならない。でも...リカルドへの思いに気がついてしまった今、これまで通りに話せる自身がなかった。

竜人は暗黒系の竜言魔法を多用すると、竜の血が濃くなり人としての心を失い竜となってしまふ。竜の動きを抑えるには聖竜騎士のもつ聖剣と聖竜魔法が不可欠なのだ。今回、前もって色々ギルが準備していたのだが...前日になって、ぎっくり腰になってしまい、他の聖竜騎士の都合が付かなかったというのが、リカルドが一人で出かけた理由だった。いつもなら、昨日のような宮殿へのお使いも本来はリカルドが行っていた。

「そうしたら...あの人に会う事もなかったんだ」

その時、天空に翼が羽ばたく音がした。

「リカルド！ 帰って来たの？」嬉しくなってアデルはおもわずテラスに身を乗り出した。しかし、舞い降りたのは初めて見る黒い竜。人に戻るとそれはギュスタ王だった。アデルは焦った。

「なぜ、挨拶もせず帰ってしまった？」

「それは貴方が...無理矢理」アデルは後ろに下がろうとした。

「手込めにしようとした...？ そんな事はしない。思わず抱きしめてしまっただけだ」王に悪びれた感じはっさいなく、あっけらかんとしていた。どうやってこの場をやり過ごそうかとアデルは考えたのだが、良い考えが浮かばない。

「帰ってください」

「そんなに私が嫌いか？」王は首を傾けた。

「好きとか嫌いとかではなく、とにかく今日は帰ってください」アデルはだんだん苛ついてきた

。

「では明日、また会いに来てくれるのかな？」王はまだ、機嫌よく尋ねてきたが、さすがにアデルは切れた。

「それはありません！」

その強い口調に苛ついたのか「会いに来てと命令するまで」と、王も少し強い口調になった。卑怯だ...アデルはそう思った。

「ギュスタ王。あなたは地位も名誉もあるお方だ...でもそんなのは関係ない。オレには大切に思う人がいる。だから貴方のモノにはならない」

王はアデルの口上に少し驚いたようだった。

「若い。若いなお前は...」そしてかみ殺すように笑った「私の力をもってすればその生意気な口を塞ぎ、ついでにその大切な誰かさんとやらを何処かに飛ばしてしまう事など造作もない...わかっているのか？」

「何故ですか？」アデルは必死だった「貴方はお妃を愛しておられるのでしょうか？ なんてお妃様を悲しませる事をなされるのですか」

王の顔色が変わった。

「お前に何がわかるッ」メラメラとしたものが王の身体からわき上がっているような畏怖を感じた。

「貴方のように元気すぎる方が、子供を産めないような女をずっと妃として側に置いている事がその証拠です」

その時、青白い光とともに爆風がテラスを破壊した。爆音で起きたご近所さん達が何事かと集まってきた。壁につかまりながらギルが様子を見に来ると、黒い翼が流れる雲間に消えていった。

「あの翼は...まさか」

#3 美しき赤い竜

目が覚めると、アデルは見慣れぬ部屋で寝ていた。何処かの塔の中のようなようだった。身動きをとろうとすると、手足にすこし打撲の痛みがはしった。

「王さまと喧嘩したんだっか」そこまでしか覚えていない。

「ここは？」

それでも手足をさすりながら、部屋から出て周りの様子を伺おうとした時、塔の下の方から、獣らしき悲しげな鳴き声が聞こえたような気がした。その声があまりにも切なく胸に突き刺ささり、いても立ってもいられず、竜の姿に変容して、飛びあがるとそこが王宮の離れの森の中である事がわかった。

声を頼りに舞い降りると、小さな劇場跡らしきその建物があつた。まわりから生えている樹の枝が、交錯してドームの屋根のようにこんもりと覆い被さっていた。背の低い花々の、月の光がおちる場所に、美しい紅い竜が一匹丸まって座っていた。何故か懐かしい匂いがした...竜もじつとこちらを見つめたので、アデルは話しかけた。

《...言葉がわかるかい？》しかし竜は答えなかった。

その時、物が地面に落ちる音がした。中年の女官がかなり動揺して立っていた。女官はしばらく啞然としてから膝を落としてさめざめと泣いた。

「どうしましたか？」アデルは人に戻って女に駆け寄った。女官の身体を起そうとした時「そこにおる竜が我が苦しみだ」後ろから声が聞こえた。振り返ると王が立っていた。

「だが、この手にかける事も出来ない。私は聖竜騎士でもあるというのに」

「まさか、王妃さま？.....」アデルは驚いた。

「いい加減、真実を隠し通すのも嫌になった...潮時かもしれん」王は抜き身の聖剣を片手に持っていた。

「いつの日にか、かつての美しい姿に戻ってくれと願っていたが」王が構えると研ぎすまされた剣先があやしく光る。竜は、剣を振りかざされても逃げようとしめない。

「どうか...どうかお慈悲を」女官が王の足元で泣き崩れる。

「待ってください」アデルはその時、竜の眼に涙が輝いたように見えた。

「何故止める？」王は首を横に大きく振った「言うな。お前がこうさせたのに決断を鈍らせるな。お前のその赤い髪と紅蓮（ぐれん）の瞳が」

王が何を言っているのか意味がわからなかったが「その竜の瞳は...まだ人の瞳をしています。だから」アデルは叫んだ。王は手を止めると、剣を床に叩き付けてその場を立ち去っていった。

女官はニナと名乗ったが、アデルの顔を見てまた泣きはじめた。

「申し訳ありません。貴方さまは昔の王妃さまにとても良く似ていらしているので...きっと王も驚かれたでしょう...」だから始めに会った時にあんな目で見られたのかと納得した。話によると...婚礼の日の夜からすでに王妃は竜の姿になってしまったようだった。

「それにしても...ずいぶんと穏やかな竜だ。聞いていた話とはずいぶん違う」アデルは恐る恐る竜の側に近寄った。

「ええ...すぐにでも人に戻れるような感じがしますでしょう。王も苦しんでおられるのです」心を失った竜は、たいがい凶暴化し残虐な容貌に変容してしまっていると聞いていたのだが、この竜はちがうのに、何故王は殺そうとしたのだろう。アデルは王の置いていった聖剣を布に包んで拾い上げた。どうやってこれを王に返すかを考えた。王宮は王と近衛騎士のみ帯剣と剣の所持が許されているからである。

「ギルに相談するか...」その場を立ち去ろうとすると、ニナがおずおずと近寄って来た。「どうか...なにとぞこの事をご内密にしてください。王妃様の命と王様の沽券にかかわりますので」アデルは必死に懇願するその瞳に心ゆれたが「オレはまだ騎士ではないが、聖竜騎士である師匠に嘘を付く事は出来ない」と女を振り払った。

「ああ」女官は力なく膝をついた。その姿に後ろ髪をひかれるように感じながら、変容の呪文を唱えようとした時「貴方は...王妃さまのお子さんかもしれないのに」というニナの言葉に驚いた。

「オレの親は流行病で死んだはずだ」

女官の話では、王に輿入れする前に王妃には恋人がいて...密かにその人との間に卵を産んでいたらしい。そして、その卵を女官の妹に託した...という話だった。生きていればアデルと同じ年頃。赤みの強い紫の紅蓮の瞳と、その炎のような赤い髪は王妃の一族に多い色だし、変化した竜の時の姿が区別のつかぬほど似すぎていると言うのだ。ただ、その事は誰にも言ってはいけないと女から口止めされた。聖竜騎士に嘘をついてでも。

「まさかね」いろんな出来事がありすぎてアデルは何も考えたくなくなっていた。

三つの時親を失ってから、国境辺境の聖竜教会の小さな施設で七才まで育ったアデルは、とある魔道士の使用人として引き取られた。しかし間もなく素行が悪いその男は、ある騎士ともめ事になった。その間に仲裁に入ったのが、その時まだ一介の聖竜騎士であったバースであったが、そのもめ事のケガが原因で魔道士は死んでしまった。

まだ幼いアデルを気の毒に思ったバースは、里親を探そうと引き取った際に、アデルに騎士としての資質を見だし、その後、弟弟子の聖竜騎士ギルに託した。彼のいきさつはそんな所だったが...両親の事は顔も名前すら覚えていない。あの小さな教会の施設の、年老いた管理人が生きていて覚えていれば聞き出せるかもしれないが。しかし、あの施設には嫌な思い出しかなく...できればもう振り返りたくない過去だった。

ギルの家に向かう途中、見慣れた竜がこちらに飛んでいるのを見つけた。《リカルド!》アデルは嬉しくなって大きく天空を回旋して合図をおくと、二人は街外れの教会の庭に舞い降りた。

「無事だったかアデル」リカルドは膝に手をつけて息が上がっている。

「探したぞ、その腕のあざはどうした？」

「こんなの、たいした事…」そう、たいした事はない。これまであったことを話したら、リカルドはどんな顔をするだろう。声がふるえ、涙が溢れそうになるのを必死で堪えた。

「とにかく帰ろう。話はそれからだ」そう言うと、リカルドは震えるアデルの肩をポンと叩いて、黙って先に歩き始めた。

たった二、三日離れていただけなのに、彼に会いたくてしかたなかった。その背中に飛びついて自分の気持ちを伝えたい。あの王さまみたいに、どンドンぶつかって行ける勇気が欲しい。でも、そうしたら...リカルドの心が離れていってしまうかもしれないと思うと怖かった。自分が王を拒んだように。

#4 聖竜騎士の使命

ギルは、辛そうにベッドに横になっていた。

「昨夜からバースに頼んで、王宮中を探しても王もお前も見つからずじまいで心配したぞ...」心配させてしまったと思い「先ほどまで、王と一緒に離れにいました」アデルは申し訳なさそうに言った。

「まさか」ギルは思わずベッドから起き上がって、痛い腰をおさえた。その師匠のあわてぶりに、アデルは誤解を招いたようだと思した「大丈夫でした。たぶん...今朝まで意識を失っていましたが」

「一体何の話ですか？」

「何も聞いていないの？」アデルが振り返ると、リカルドの表情が硬かった。

「説明しようにも、今朝戻ってすぐお前を探しに出たからな」ギルは痛そうに腰を抑えながら横になった。

アデルは、ギルのお使いで王宮に行って、王に初めて会った時の話をしはじめた。そして次の日に、従士に抱えたいと望まれて、ギルが賛成した話をした時には、リカルドの表情がだんだん険しくなってきた。王に会いに行って、押し倒されそうになったくだりを話した時には、リカルドの顔色は変わっていた。

「それでその晩に拐われると、何故考えなかったのですか！」激しくギルを責めるリカルドにアデルは戸惑った。

「落ち着いてよ」アデルはリカルドの腕をつかんだが、振り払われた。

「落ち着いていられる話かッ」リカルドは頬が高揚し、拳を握りしめていた。これほど怒っているリカルドをアデルは初めて見た。

「やめてよ」アデルは泣きそうにリカルドに言った。相手が誰であろうと、自分のために本気で怒ってくれているリカルドの姿を見てアデルは嬉しかったのだが。

「王さまを怒らせたのはオレの方なんだ...オレ、何も知らなかったから」

「何を言っている？」リカルドは、少し冷静になったようだった。

「これを」アデルは布から抜き身の剣を出した。一瞬あの女官の顔が頭を横切ったが。

「それは...王の聖剣ではないか...どうしてお前が？」ギルが再び身を起こした。

アデルは、自分が妃の子であるかもしれないという話以外を二人にした。しばらくの沈黙ののち「お前は、王を止めるべきではなかった」とギルが言った。

「私たち聖竜騎士の使命は国を守り、人民を司り、人の心を失った肉体に縛られた魂を解き放つ事だ。その人の心を失った竜の存在が周知に曝されずとも、災いをもたらすものとして、いずれ聖竜騎士となったお前は使命を果たすために仕留めればならん。だが、そんなお前を王は許さんだろう。ただでは済まされまい」

「使命を果たすために仕留める？ どうゆう事ですか。殺すのですか？」アデルは愕然としたが

、ギルが目線をそらしたので嫌な感じがした。

「だってあの竜は」自分の母かもしれない「あの竜の瞳は澄んでいて...穏やかで、すぐにでも人に戻りそうでした」

「私がやります」リカルドは、顔色一つ変えずにギルに言った「彼の指導の多くは私がしました。アデルの不徳の致すところは私にも責任があります」リカルドは席をたってギルの聖剣を手にした。

「しかし、リカルド.....それではお前に」ギルはリカルドを引き止めようとした。

「竜を一匹殺すだけです。王妃を殺める訳ではありません」リカルドの瞳をアデルは冷たく感じた。

「私が案じているのは王の心証の方だ」ギルは、再三彼を引き止めたが、リカルドは振り返えることはなかった。

「聖竜騎士じゃないのに！　なんで」アデルは思いとどませようと叫んだ。

「いいや。彼は...無事に竜を仕留めて戻ってきた。すでに一人前の聖竜騎士だ」

師匠の言葉にアデルは焦って部屋を飛び出した。

「まって、待ってよ！　リカルド」中庭で今にも飛び立とうとしていた兄弟子をアデルは引き止めた。

リカルドは腰の巾着から三角の鱗を出して、アデルに渡した。

「竜の額の鱗だ...魂が宿っているとされている」

アデルの指先が震えた「ま、まさか...捕縛に行ったんじゃないのか？」

「オレも昔はそう聞かされていた」リカルドの瞳が悲しい色になった。「人と竜の間を意思で行き来出来るのは、我々のように魔力を制御できる精神力を鍛えあげた者だけだ。普通は一度竜になるともう人の心は戻らない」

「でも」アデルは叫んだ。

「これまで何度も見てきたッ」リカルドは怒鳴った。しかし、アデルが泣きそうになるのを感じて、リカルドは自分が強い口調になってしまったのを悔いた。

「...王宮の離れの森の劇場跡だったな...大方の見当はつく。お前は来るな。まだ早い」思いあまって、アデルはリカルドの背中に抱き付いた。

「お前の気持ちは察しが付く...だが引き止めるな」暗く沈んだ背中だった。

「...あの竜、あの人はオレの母さんかもしれない。だから、お願い」リカルドが驚いて振り返った。

「嫌な感じだ。ここの所この島の各地で起きている異変と結びつきがなければいいが」ギルが重い口調で語りかけるとリカルドはうなずき、神妙な面持ちで話した。

「人がもたらす秘薬を用いて、竜に変容してしまう竜人が増えているのは.....結界が緩んで、大陸人が流れて来ているからだ」と騎士の間にも噂が広がっています」

「お妃さまは、聖王の血筋の方だ。それにあの子は...伝承の聖王のように『炎の様に赤い髪』『紅蓮の瞳』強い魔力に、人を魅了する美しい容姿をしている。予言があるのだ...『竜が吠え

、人が大地を穢す時、王の血脈の映し身が転生し、己の血の雨を降らせて怒れる大地を鎮める』と。言い伝えを多くの人々は恐れている。大地の怒りを止められぬと、結界が消えて祝福の地が永久に失われると。その女官の話しが本当なら.....あの子は生け贄に祭り上げられる」ギルは強く両手を組合せた。

「そんな...」リカルドは、辛そうに話す師の顔をじっと見つめていた。

「だがしかし、結界が緩くなっているという噂は本当なのだろうか。この間も死んだ数人の大陸人が東の砂浜に打ち上げられていたそうだが」ギルがため息をついた。

「私が聞いた話では、その男達は異形をしていたそうです」リカルドが重く答えるとギルが嫌な顔をした。

「そんな異形を操るのは、大陸人の死霊魔術士ぐらいだが...」

「死霊魔術？」

「死体を使って、人形のように操る秘術だ。しかし、竜人の我々には大陸の魔術はそのままでは効かないとも聞くが、そういった話は魔道士の方が詳しい。ああ、今は考えるのはよそう...お前も疲れているのだ。休みなさい」

「はい」ギルのベッドの脇の椅子から立ち上がり、リカルドは足を止めた「アデルの事、調べてきます」

「よかろう。慎重にな」

#5 聖竜の翼

リカルドが部屋を出ると、廊下の手すりにアデルが座って待っていた。ギルに席を外せと言われたからだ。

「大人だけの話はおわった？」アデルは少し不機嫌だった。

「お前はもう子供じゃないさ。お前には聞かせたくない話しをただけだ」

「やっぱり子供扱いじゃないか」口を尖らせたアデルを見てリカルドは笑った。

「いつものリカルドに戻った」

「アデル？」

「さっきのリカルドは少し怖かった。いや。聖竜騎士らしかったと言わないと」リカルドはうつむいた。

「おめでとう...と言わないといけないのに、こんな状況じゃ言えないよな。こんな事になってごめん...」アデルはすまなそうにうつむいた。

「お前が謝る事じゃないさ」

「それに...ちっとも嬉しそうじゃないし」その言葉にリカルドは視線をはずしうなずいた。

「オレも嬉しくない。だってリカルドと離れたくない」

「アデル...」リカルドはアデルを見つめ返した。

「リカルドとずっと一緒にいたい。オレ、王さまに言いよられて気がついたんだ。自分の気持ちに...」リカルドが黙っているのので、アデルは急に気まづくなった。

「...あ、何言っているんだオレ。どうかしているよね」と、いい逃れをしようとした時、リカルドに突然抱きしめられた。時間が止まって、アデルは心臓が止まるように思えた。

「これじゃあ、どこかの王さまと同じだな」バツが悪そうにリカルドが腕を外したので、アデルは小さく笑った。

「違うよ。もっと強く抱きしめられた。こんなふうに」アデルはリカルドを抱きしめ返した。

「アデルちゃん。買い物につきあってくれるかい？」奥から、ご母堂の呼び声が聞こえて、あわてて二人は身体を離れた。

「はい」アデルは返事をして声の方に走っていった。振り返るとリカルドがまだ呆然として立っていたが、アデルは嬉しくて仕方なかった。

その日の夜は風の吹く晩だった。

「起きてる？」アデルはリカルドが寝ている部屋のドアをたたいた。すると、すごい勢いでドアが開いた。リカルドは下着をはおっていた。

「そ、その。オレの部屋の壁がこわれたままだから、相部屋にしてくれって言われて。そこの長椅子使うから」アデルはいそいそと枕を置くと毛布をかぶった。ベッドの横にいるリカルドの視線をひしひしと感じる。

「朝方冷えるからこっちにおいで」リカルドの口調は優しかった。

「でも、狭くなるよ」緊張で気持ちが悪くなりそうだった。

「いいから...来てくれ」アデルは激しく心臓が鳴って口から飛び出しそうだったが、おずおずとベッドに座ると自然に落ち着いてきた。リカルドがその横に腰かけた。

「さっきまで、どうやってお前を誘うか考えていた...砦跡まで競争して、もちろんオレが勝つだろ？それから」

「もちろん？」

「もちろんさ」

「どうだか」

アデルが小さく笑うと、二人は笑いながらベッドの上に転がった。しばらく見つめ合った後、リカルドはアデルの頬に手を添えて「壁を壊してくれた王さまに感謝しないといけないな」と言うと、笑いながらそっと唇にキスして抱きしめた。抱きしめられてアデルはまるで大きな翼に優しくつつまれているような気持ちになった。

時折強く吹く海風が、庭の樹の梢をざわざわと揺らす。アデルは目を閉じて身体をリカルドに任せた。

次の日の朝、夜明け前に目覚めたにもかかわらず、リカルドはもうベッドにいなかった。ベッドから出ようとした時、シーツの汚れが目に入った。昨夜の事を思い出し、急にはずかしくなって顔が熱くなった。むしろリカルドがいなくて良かったと思った。明るくなる前に洗濯してしまおうと中庭まで出て、ぎこちなく水汲みをしてあくびをすると、ギルの母が起きてきた。

「眠そうだね。おや、リカルドは出かけたのかい？」アデルはうなずいた。

「長椅子だと良く眠れなかったろう？ すまないけど、壁の修理が済むまで我慢しておくれ」

「へ、平気です」少し声が上ずった。昨夜はふたりでベッドに寝た。よく眠れなかったのは違う理由だったから。

「あ、洗濯はオレが」汚れたシーツを取られそうになり、慌てて掴んだ。その慌てぶりにご母堂は笑った。

「お前さんが娘なら可愛くて本当にいい嫁さんになるのにねえ。ギルとは年が離れているけどリカルドには丁度いいわね」

「へ、変な冗談はよして下さい」アデルはドギマギして耳まで赤くなった。その時、井戸の向こうから場違いの男の声がした。

「アデル。戻っていたのか。王はご一緒か？」バース宰相だった。

「昨日、王宮の離れの森で別れました」アデルは差し支えのない程度に答えた。

「何事ですか？」バースの声にギルが腰を抑えて部屋から出てきた。

「昨夜も王は戻らず、聖剣バリスタスもないのだ。朝の神事が控えているというのに」

アデルはあの剣にちがいないと思ったが「どんな剣ですか？」と尋ねた。

「紅い石が柄に散りばめられた。少し大ぶりの」バースは両手で大きさを指し示した。

「それなら...これではありませんか？」アデルは布に包んだ剣を持ってきた。ギルはあわてて声を出しそうになった。

「おお。まさしくこれだ！ これをどうしてお前が」バースは剣を振りかざすと、赤い石が美しく煌めき、剣先が朝日をまぶしく反射した。

「王宮の離れの森で拾いました。持ち主に返すために今日にでもバース様の所にご相談に上がれと、お師匠に言われておりました」アデルはもっともらしく理由を説明した。

「おお、そうだったのか」バースは礼をいうと剣を持って疾風の如く王宮に戻っていった。後には静寂が残った。

「お前…」ギルは呆れていた。

「嘘はついていないです」

「あのな。…まあ、一つは面倒が片付いたが。得意げな顔をするな」アデルはギルに軽く頭を小突かれた。

「だけど、王さまはどこに行かれたのでしょうか。ワインがお好きそうですから、どこかに籠って飲んでいるのでしょうか」アデルのその言葉にギルは何をひらめいたようだった。

「うむ。そうかもしれん。どれ…心当たりを捜してみるか」ギルはゆっくり中庭のステップを上がった。

「大丈夫ですか」アデルが心配そうに介助しようとする手を止めた。「なに、いい加減休んではかりもおられんし」

「ここにおられましたか」ギルが足元に注意しながら痛い腰をまげた。

王は聖都の街角の小さな酒屋の蔵にこもって、酒を樽から直接飲んでいた。

「酒なら上等なのが王宮の蔵にいくらでもあるでしょうに」

「この、カビ臭い酒蔵の安酒がいいのだ。酷く酔えるからな」王はかなり投げやりになっていた様子だった。

「王よ。宰相が血眼で捜しています。いい加減になさってください」呆れたようにギルは王をなだめた。

「なにお。そもそも貴公がヘッピー腰になって、あの子をよこすのがいかんのだ」

「ギックリ腰です」ギルは思い出したように腰を押さえた。

「しかし、生意気な子だ…あんなに可愛いのに。ううっ。クソったれ」王はふらついて地面に手をついた。

「かなり酔っておられますね」ギルが王を支えた。

「すごい…ただの酔っ払いのオジサンだ」王が近衛騎士に連行されるように引きずられて行くのを、アデルは他人事のように呟いた。

「これ、言葉に気を付けろ」ギルは小さくアデルの頭を小突いた。

「ギル。オレ…もう大人です。大人になりますから。ですから、リカルドと同じように扱ってください。同じように使ってください。お願いします」

「騎士になったらな」アデルは再びギルに頭をグリグリされた。

夜遅くりカルドが帰り、なにかギルに報告して部屋に戻ってきた。

「起きていたのか」

「ギルが王さまを見つけたんだ」アデルはベッドから身体を起こした。

「聞いたよ。酒蔵にこもっていたって？ 宰相閣下も醜聞を揉み消すのが大変だろうな。お前があの剣を閣下に差し出したそうだが、ギルに心配をさせるんじゃない」

「うん」アデルは小さくうなずいた。

リカルドは上着とブーツをぬいで下着になると、ベッドに腰掛けた「...あれは聖剣バリスタだったのか。美しいが悲しい剣だ」

「悲しい？」

「あの剣には鞘が無い」

「あんなに立派な剣なのに？」

「竜の血を浴びるたびに、その形を変えるという話だ」

「うわ...何それって怖い」

「なんてな。本当の理由はオレも知らない」リカルドは笑った。

「なんだよもう」口を尖らせてアデルはリカルドの胸をたたくと、乱暴に押し倒され抱きしめられた。

「ああ、アデル。オレの...」耳元の熱い囁きにアデルは、身体がぞくぞくして身じろぎ喘いだ。

次の日の朝も、アデルが目を覚ますとリカルドは出かけていた。

「一声かけてくれても良いのに」

ここ何日か手合わせをしてもらえていない。お使いなどの雑用が多くて、魔道書を落ち着いて読む時間も持たてていない。砦跡の時に比べて洗濯以外はかなり楽なはずなのに。ギルの母君は助かるって喜んでくれているが。ギルの身動きが取れなかったのも、来客が頻繁で忙しいのだ。

「これでは修行にならない...一日も早く騎士になりたいのに。それに滝に打たれてさっぱりしたい」

その時、ギルの母の焼く砂糖とバターがたっぷりの美味しいお菓子の匂いがして来た。ここは誘惑も多い。アデルはため息をついた。

「家事ばかりやって、なんだか本当にリカルドの嫁さんみたいだ...うわ、何言って。オレ」アデルが一人で顔を赤くして首を振っている時、バース宰相から遣いがやって来た。

#6 切なき思い

「アデルを近衛騎士に？」戻ってくるなり、ギルから話しを聞かされてリカルドは目を丸くした。

「どうやら王は寝込んで仕事にならんそうだ、バースに泣きつかれてなあ」

「で、本人は」

「従士よりは格段の出世だが。聖竜騎士以外にはなりたくないそうだ」

リカルドはしばらく黙り込んで考えた。

「あの子をどうやって人目から遠ざけるか、私なりに色々考えていたのですが...髪を染めてもあの子の顔立ちは目立つ。変容の魔法は長い時間使えない。でも、近衛騎士の赤マントは派手だ。むしろ逆に人目に付く方が...人は気にしないかと」

「リカルド？」

「あの子が七つまでいた寺院の使用人から話を聞いて、亡くなった管理人が生活のために売った、あの子の親の遺品を見つけました。竜言魔法避けの呪文が高価な魔法繻糸で施してありました。そんなものを普通は身につけてはいないでしょう」

「それではあの子は...」ギルとリカルドは、窓の向こうで家事を手伝っているアデルの姿をじっと見つめた。

「聖王は十七才で聖竜騎士になった。じき十七になるあの子が聖竜騎士の白マントを身につけ竜を仕留めでもしてみろ...それこそ聖王の生まれ変わりだと噂されてしまう」ギルの言葉にリカルドはうつむいた。

「今日こそ、稽古をつけてもらおう」窓辺で魔道書を開いていたアデルは、リカルドの姿を見るなり走り寄り「手合わせお願いします」と頭を下げた。しかしリカルドはいつもと違う冷たい顔をしていた。

「お前は近衛騎士になりなさい。その方が向いている」

「へ？」

「王には、宰相閣下やギルからしっかりと釘を打ってもらう。だが、お前はこれからも誘惑されるだろう。軽く受け流せるぐらいの処世術を持ちなさい」

「どうゆう事？」

「私からはもうお前に教える事は何も無いという事だ」そう言うと、翼竜に変貌して何処かに飛び立って行った。アデルは啞然として立ちすくんでしまった。

夕食の時間になってもリカルドは戻って来なかった。

「しかし、えらく気に入られたものだね。その年で近衛騎士だなんて」ギルの母は素直に喜んでいた。

「前例はありませんが、アデルには騎士としての実力は既にありますので問題はありません」

「だけど、辛かったらいつでも戻っておいで。騎士だけが人生じゃないのだから」ご母堂はアデ

ルに話しかけた。

「母上はアデルに甘すぎです。自分の道は自分で切り開くのだぞ。アデル」しかし、ギルとギルの母君のやり取りをぼおっとして聞いていたアデルは、話しかけられたのがわからなかった。

「ほとんど、食べていないね。具合でも悪いのかい」

「あ、いえ、大丈夫です。ごちそうさまでした」二人の心配をよそに部屋に戻ると、冷たいベッドに腰掛けた。

「今夜は帰ってくるのかな。突然すぎて何がなんだかわからないよ」アデルはうつむいた。

「いつかは、別れる日が来るってわかっていたけど。でも...」アデルは昨夜の事を思い出した。一晩中、抱きしめられてキスされて.....。

「ずっと、お前とこうしていたい」そう言っていたじゃないか。身体が疼いて辛い。アデルは毛布を抱きしめてもがいた。リカルドが自分を捨てるはずはない。でも、何故せめて一緒に道を歩かせてくれない？ 王宮に入ったら、これまでのように簡単には会えなくなるのに。

でも。リカルドは冷たい目をしていた。

「オレを嫌いになったのか？ どうして？」わけが知りたいとアデルは思う。その時、木の枝が大きくゆれた音が聞こえて、リカルドが戻ってきたのかと窓際に駆け寄ったが、リカルドではなかった。

「そうだ」アデルはリカルドの居場所に見当をつけた。

夜風で滝に打たれた髪を渴かしながら、リカルドは砦跡から下方に流れる川を眺めていた。

ギルと話し合っ、アデルを近衛騎士団に移籍させる事にしたのは自分だが、本人はきっと納得していないだろう。たとえ、理由を説明してもそれでも納得しないだろう。

今、自分が出来る最善の事は...遠くから見守る事だけだと頭ではわかっているのだが、それがこんなに辛い事だとは思わなかった。離れれば離れる程、アデルの事が気にかかって仕方ない。そして身体が...アデルを欲しがって仕方ない。滝に打たれに来て心を落ち着かせようにも、今日は効き目が無い。今すぐ戻って抱きしめてキスしたい。

「オレの心がこんなに脆いなんて、思いもしなかった」

「やっぱりここにきていたのか」振り返るとアデルが後ろに立っていた。リカルドは動揺した。

「わけを聞かせてよ。何でオレから離れようとするの？」

リカルドは黙っていた...正確には言葉が出なかった。どうしたら、アデルが自分を一人にしておいてくれるだろうかと懸命に考えた。

「何か言ってよ」

「お前がここに来るまで、オレは独りぼっちだった」

「なんの話？」

「ギルはあの通り忙しい人でほとんど外出していた。だからお前がここに来た時には、本当に嬉しかった」

「リカルド……」

「お前は手がかかる面倒くさいやつだったけどな」

「悪かったな」

「一日も早く騎士になって、この寂しい場所から出て行きたくて仕方なかった…そう考えていた。だが騎士になった時にはここから離れたくなかった。…お前と別れたくなかった」

「だったら何故」アデルがリカルドに詰め寄って、腕をつかんだ。それはお前を愛しているから。リカルドはそう言いそうになるのを堪え、アデルの手を払った。

「お前を抱いてわかった。オレはお前を愛していない」

「リ……」

「オレに興味があったのは、お前の身体だけだった。だがもうそれもどうでもいい」アデルはまだ信じられなかった。

「飽きたんだよ。さっさとオレの前から消えてくれ」

「ひどい…」アデルが後ずさりして飛んで行くのがわかった。

「本当にひどい奴だ。オレは……」リカルドは声を殺して泣いた。

どれだけ飛んだのかわからない。気がつくときアデルは王宮の離れの森のあたりまで飛んできていた。息が切れて降り立つと、疲れてそのまま倒れてしまったが、リカルドに抱きしめられているような感じがして目が覚めた。

「ねえ。嫌な夢をみたよ。リカルドがひどい事を言うんだ」

しかし、月明かりがほのかに周囲を照らしているそこは、いつもとは違うが見覚えのある場所だった。アデルはあの竜の翼に包まれているのに気がついてハッとした。

「あ…」竜の目はやさしかった。アデルは震えながら竜をなでた。

「リカルドは正しい…オレは聖竜騎士に向いていない。こんな目をしていたら殺せと言われても殺せやしない。あ、ああ……」

竜の身体がリカルドと同じ暖かさだと感じて、悲しみがとめどもなくわき起こって来た。どんなにか自分はリカルドの事を好きだったか。でももう想いは断たれてしまった。アデルは嗚咽しながら竜に抱きついた。

#7 近衛騎士

近衛騎士団の宿舎は王宮の一角にある。

ガラント騎士団長は挨拶するなり、アデルの足元に剣を投げ、斬りつけてくるように言った。他の団員達が興味深く二人の動向を見ていた。仕方なく剣をとって構えると、団長は剣を振り下ろして来た。目がくらむような早い速度で二、三太刀をかわしたのち、ものすごい力で振りかざされた太刀を受けたとたん手がしびれて剣を離してしまった。

「まあ、所詮聖竜騎士なんぞこんなものだろう。いざという時、足手まといになるなよ」カッとしてアデルの顔が真っ赤になった。手から青い炎を出し、団長の足元をすくった。

「提唱もなしに聖竜炎か」

「聖竜騎士をバカにするなッ。今度はマツゲを燃やしてやるぞ」

「ふん、元気だけはよさそうだ」団長は、一人の団員にむかって「世話してやれ」と言って執務室に戻り、団員たちは自分たちの持ち場にもどっていった。

「僕はライナス。よろしくな」彼はその場にいた団員の中では、一番年が若く、リカルドぐらいの年齢だった。

ライナスは宿舎の設備を案内してくれた。「しかし君、すごいね～ 団長の太刀を受けるなんて」

「まだ手がしびれています」アデルは手を閉じたり開いたりした。

「それにあれ、あの魔術、聖属性の魔法を見たのは初めてだ」

「人に向けてあまり使う事は無いですから。うっかりして...」

「聖竜騎士は竜になって空を飛ぶんだよあ...ここだけの話。僕は聖竜騎士になりたかった。魔力が弱くて無理だったけどな。もっとも、昔は近衛騎士になるのにも魔力が必要だったみたいだったけれどね」

少しおしゃべりだけど、感じが良い男だとアデルは思った。リカルドとの第一印象とはえらくちがう。

『あの人は...無愛想でほとんどしゃべらなかった。一緒にやっていけるのか心配したな...結局やっていけなかったって事になるのかな』いや、リカルドの事はもう考えないようにしよう。アデルは悲しくなった心を振りはらった。

次の日、近衛騎士のマントを身につけたアデルは王から騎士の証を賜った。赤く輝く美しい石。ギルやリカルドの身につけていた碧い石ではなく少し残念だった。王はとっても嬉しそうだったが。

その日から、王の執務室に入ってすぐの所に待機しているように命じられた。

王の武具の手入れをしたり、お茶をいれたりするのが彼の仕事だった。王は謁見やら会議やらで、ほとんど執務室にはいなかったが、ちょこちょこ部屋に戻ってはアデルの様子を見てはにやにやとして公務に出向いた。

「いいのかなあこんな事で」そう疑問に思っていると、程なくバース宰相が顔をだした。どう

やら、王はここ何日かで、はじめてちゃんと起きて王さまらしい事をハイテンションでテキパキこなしているとの事だった。

「効果がてきめんだな。これからもよろしく頼むよ」と、アデルに握手していった。

もちろん夜明け前に起きる剣の稽古は厳しかったが、そんな事はこれまでも毎日やっていた事だった。砦跡にいたころにはその他に食事の仕度やら洗濯があった。

しかも朝迄に帰れば夜勤以外はかならず宿舎にいななければならないという事はなく、想像以上に自由だったのでアデルは拍子が抜けたようだった。

消灯時間まで、たいていの夜は賭け事やらで、宿舎はわいわい騒がしかったのだが、ライナスが、娼家に行こうと誘って来た。

「初体験はお前ぐらいの時だったかな。相手が母親とそう年が違っていなくて焦ったよ。どんな人が好みかい？」ライナスは陽気に話しかけてきた。

「オ、オレは、まだいいよ。お金ないし」

「金なら任せろよ」

好きでもない誰かと寝るなんて当分考えられない。

「いや、本当に。そのうち良い店を教えてくれ」アデルは適当に受け流した。

次の晩にも誘われて、これからいちいち断るのも面倒なので、夜は何処か出かけてしまおうかとアデルは考えた。ギルの家に行ったら、里心がついたのではないかと心配させてしまうだろうし、本当は砦跡に行きたいのだが...リカルドに会うかもしれない。

オレは会いたい...けど、あっちはオレに会いたくないだろう。また彼の事を考えてしまった。忘れるためにはどうしたらいい？ アデルは泣きたくなくて宿舎を飛び出した。

いつのまにかあの竜に会いに来ていた。竜によりそって、美しい星空を見上げながら、一方的に話しかけた...というか独り言を言い続けた。リカルドに関する話しになると、泣いてしまう事もあった。でも、話しているうちに心が軽くなるようだった。

近衛騎士になって一ヶ月ぐらいたった昼時、フリンがアデルをたずねて来た。

「うわー。なんか派手な赤だね。でもとても良く似合っているよ！ うわーなにその赤い石。ピカピカして綺麗じゃん...いいなあ」

「相変わらずだね...お前。所で、なにしに来たんだ」

お師匠さまの調子が良くなり、明日にでも砦跡の修行場に戻る事になった。それで、ご母堂さまがお別れの夕食会を開きたいらしい。

「行きたいけど、行けるかなあ...（リカルドいるし）」

「なんだよ～ リカルドと同じ事言うなよ。アデルが来れば、絶対リカルドは無理しても来ると思うよ」

「.....え？」

「だって、リカルドはアデルの事、大好きだもん。アデルもリカルドが好きだろ?...なに？ 何だまっているのさ」

「いや、そのな、今オレとリカルドは絶交してさ…」

「えーっ。またケンカしたの？ だったら仲直りしちゃいなよ」

「無理。修復が不可能な絶交なんだ（たぶん一生）」

「そうなの？ …それでリカルドの元気ないのかぁ」

「元気がない？」

「うん。こここのところ毎日のように竜の捕縛に出かけているらしいから、ご母堂が疲れているんじゃないかって言っていたけど。顔色が良くなかったし」

『彼が毎日…竜を殺しているのか』アデルは立ちすくんだ。

—「これまで何度も見てきたッ」—

リカルドのあの悲しみと怒りに満ちた顔を思い出した。

「どうしたの？」

「あ、いや行くよ。王さまに誘われたって断って行くよ」

「うわぁ。なんか例えがすごいけど、待ってるから！」フリンは元気よく走って行った。

#8 変らぬ思い

ギルの実家から出てまだ一ヶ月しか経っていないのに、王が壊したテラスはもう修理されていて、アデルにはとても時間が流れたような印象を与えた。

「いらっしゃいアデルちゃん！ ちょっと痩せたかしら？ 今晩は泊っていけるの？」ご母堂はアデルの髪をやさしくなでた。

「朝までに戻るのが規則なので...」

「そう。残念ね。せっかく壁を直しておいたのに。まあ、今夜は沢山食べておゆき」アデルがうなずくと「元気にやっているか」今度はギルが頭をなでた。

「すっかり良くなりましたのですね」

「ああ、この通り。心配かけたな...」ギルは腰を回したり、身体を反ったりした「お前のおかげで国務に滞りが無くなったとバースが感謝しておったよ、私も鼻が高...な、なんだ」アデルはギルを部屋の隅に引っ張った。

「リカルドが毎日竜を捕縛に行っているっていうのは本当ですか」

「本人たっの希望でなあ。私も程々にしろと言っているのだが」

「本人の？ そんなのおかしいですよッ」アデルはギルにくらいついた。

「近衛騎士に聖竜騎士の仕事をとやかく言われる筋合いはない」その時、リカルドが部屋の入り口に立っていた。アデルとリカルドの間に緊張が走った。

「さあ、みんな集まったからごちそうになろうよ〜」二人の間に張りつめた緊張をさも気にしていないように、明るい口調でフリンが割って入った。

会食が始まり、アデルは横目でリカルドを捉えた。胸に聖竜の印の入った白マント...リカルドが正式な聖竜騎士の格好をしているのを見るのは初めてだった。しかし、もともと痩せぎすだった身体はさらに骨張り、青白く険しい顔になっていた。リカルドの横顔は硬く冷たかったが、それでもアデルは会えて嬉しかった。

「私も年だから、こんな風にみんなと食事をとれるのも、最後かもしれないね」ご母堂はしみじみ話した。

「なに弱気になっているのですか母上。ピンピンしているくせに」ギルが少し怒った口調で答えた。

「そうですよ！ 僕が騎士になるまで元気でいてください。その時はお祝いでみんなに集まってもらいますから。ね？ アデル」と、フリンは元気よくアデルに話しかけた。リカルドの事が気になってしかたないのに、こっちに話題をふってくるな！ と思いながらも、満面の笑みで「きつとそれまでには可愛らしい孫ができているかもしれませんし。ね？ ギル」と、アデルはなんとかしてくれとばかりにギルに返した。

「その話題を私にふらんでくれよ。まだ嫁ももらっていないのに」と、ギルが困惑した。

「そうだよ。まったく...早くしないとリカルドのほうに先に子供が出来ちまうんじゃないかい」母は容赦なく息子を攻撃しはじめた。

「いいえ、私は結婚しませんから」リカルドの返事にアデルはドキッとした。

「何言っているんだい、ギルに遠慮しなくていいよ。お前さんみたいないい男だったら見合いだってなんだって引く手数多だよ。任せてくれたら紹介するから」ご母堂は身を乗り出してやる気まんまん。

「母上。私を差し置いています」呆れて息子が母にツッコミを入れた。

「リカルドみたいな匂いでイキの良いのが方付かずにそばにいたら、そっちに目移りしちまうだろ？ わかっていないねお前は」母親は、多少興奮して応戦した。

「その点なら大丈夫です。私はしばらくこの国から離れることになりましたから」リカルドは冷静に答えた。

「ええっ、どこへ行くの？」フリンが目を丸くする。その時ギルが咳払いをした。

「新しくルーシェン公国をお継ぎになったアドウィン公爵が、リカルドの評判を聞きつけて、宰相閣下に専属に欲しいとご依頼されたらしい。リカルドにとっても独立するのにいい機会だったので、派遣されることになった」アデルは思わずリカルドの顔をまじまじと見てしまった。リカルドは相変わらず無表情だった。

「えーっつ。ルーシェンかあ～いいなあ。上手く飛べるようになったら遊びにいつでもいい？ 半日かからないよね？」フリンがワクワクしながらギルにお伺いをたてたが「お前はまだ修行場以外では魔法を使うな」と、師匠に止められシュンとしてしまった。

夕餉が終わると、リカルドは旅仕度があるからとさっと席を立ってしまった。

「あの子...大丈夫かしら」ギルの母が、元気のないリカルドを心配した。

「もう一人前ですから。心配なされないでください」ギルが母をなだめた。

「もともと、無口だったけれど...最近は殺気立っているというか。ああいう雰囲気の子じゃなかったのにな」

しょっちゅう竜を殺しているのじゃ、殺気立つのも無理じゃない。リカルドは苦しんでいるはずだ...と、アデルも心配になった。あの森の竜のように優しい竜もいるのに、どうして殺さないといけないのだろうか。そもそも竜のもたらす「災い」とは何だろうか。

気がつくのと、リカルドのいる部屋の前に立っていた。この扉を開けて...もう一度リカルドの気持ちを確かめたい。そんな思いが募った...でも。

『バカだな。しつこくしたらもっと嫌がられるだけなのに』アデルは唇を噛んだ。だけど、ずっと会えなくなっとなうのならこれを最後に自分の思いを伝えたい。兄弟子の独立を、素直に喜んで送り出してあげられない自分が情けなかった。

「まるで、アイツから逃げるようだな」リカルドはベッドに横になって、先ほどの騎士の格好をしたアデルを思い出していた。

「私用ではあの赤いマントは着られないのか...見たかったが」そして小さく笑うと手で顔を覆った。その時、足音が聞こえたので、アデルじゃないかと思い身を起こした。気配は扉の前でとまった。

「今のリカルドは...リカルドラしくないよ」アデルの声だ。

「オレはオレなりに、何で聖竜騎士が何故竜を仕留めないといけないのか、理由を調べようと思う」

リカルドはベッドから起き上がり、扉の前に立った。

「これだけは言わせて欲しい。オレの気持ちは変わらないから」アデルの声は扉の前から去っていった。

リカルドは高鳴る鼓動に、今すぐ扉をあけて、追いかけて抱きしめたい衝動にかられた。

「アデル」オレだって...お前の事ばかり考えている。言葉に出来ないその思いを懸命に抑えるために、扉を思い切り殴ろうとして留まった。

次の日の朝、旅立つリカルドはギルに呼び止められた。

「先代は聖竜騎士を嫌って駐在するのを快く思われなかった。新しいルーシェン公は、どのようなお考えの方か分からない。用心なさい」そして周囲をさっと確認して、続けた「あの竜以外、今の所この国のたいがいの竜はいなくなったから、しばらくは大丈夫だろうが。あちらでも誰かに悟られぬように慎重に」

リカルドは苦笑いした「...お見通しでしたか。アデルをよろしく頼みます」

「アデルからもお前をよろしく頼まれたよ。あいつも大人になったものだ」おやおやといった感じでリカルドは小さく首を振って笑った。

#9 魅惑の庭

リカルドがお目見えを許されたルーシェン公となったばかりの国主アドウィンは、赤めの栗毛の髪と紫の瞳をした三十代前半の貴公子然とした美しい男だった。

「君が、このあいだ竜を退治してくれた聖竜騎士だね。子供の頃は、私も聖竜騎士に憧れたものだ。魔力が弱くてなれなかったが」

公邸の庭には綺麗な花がさきみだれている。そこに十二、三歳才の少女がこちらに気付き走り寄ってきた。

「我が娘だ」炎のような赤い髪に紫の瞳の美しい娘だった。アデルに似ている。リカルドは息を呑んだ。

「この方が例の聖竜騎士さまね」

「これ、ちゃんと挨拶なさい」

「ミランダよ。よろしく」少し強気な感じがするところまでアデルに似ている。リカルドは思わず微笑んで、ひざまずき彼女の手の甲にかかるくキスした。

「リカルドです。以後お見知り置きを」少女は顔を赤くして、小さくお辞儀をしてそそくさと花園の奥に走っていった。

「驚いたな...」

「何でしょう」

「ひと月で竜を二十匹切った冷酷な男とは思えん笑顔だ」

リカルドは背中に冷たいものが走るのを感じた。

「あ、嫌、気を悪くされるな。私は仕事の出来る頼もしい男は大好きだ。今晚、一緒に呑まないか。ぜひ君の話聞かせて欲しい」

リカルドは公に誘われるまま、テラスで夕食を共に当たり障りのない世間話をした。

「この国で一番の酒を振る舞まおう」美しいグラスに注がれたその酒は大変喉越しの良いものだったが、少し魔法を効かせてあるようだった。

『何を聞き出したいのか.....』

聖竜騎士は、幼少より暗黒系の竜言魔法から身をかかわす修行をしている。また、リカルドの身につけている聖竜騎士のもつ『騎士の証』は聖属性の魔石で、大抵の魔法ははねつけてしまう効果があった。この人物が、一体何の話を聞きたいのかわからなかったが、アデルの事を調べるためには、この男の懐に入っていかなければならないだろう。

「ところで君は、どうしてそんなに急いで竜を殺している？ 名をあげて出世したいのか？」公はワイングラスをくゆらせた。

「聖竜騎士としての勤めを果たしているまでです」リカルドは無難な回答をした。

「ふうん。君はいずれ選王になりたいのかとばかり」公はまるでリカルドの王に対する忠誠心を試しているようだった。

「王がご健勝のうちから話す事ではありません」

公は小さく笑った「いやいや、ご健勝の今から考えておくべきことだ。バース殿の話では、若い騎士の中では君が一番有望だと聞いているが」公は給仕にリカルドのグラスに酒を足させた。どうやら公は自分を酒に酔わせたらしい。

「貴公は私を選王に押したいように聞こえますが、何かお望みでも？」アドウィンはおやおやと言った顔をして、人差し指をゆっくり動かした。

『魔力を隠しながら魅了の魔術か。魔力が弱くて出来る芸当ではない。この男は油断ならない』
「私はイリーナを...姉君を取り戻したい」公は紫の瞳を輝かせたが、リカルドには意外な話だった。

「王妃様を？」

「嫁入りして十数年。子も成さずずっと寝込んでおられるのは、そちらの気候が体に合わないのかもしれない。なのに、何故ギュスタ王は姉上を見限らないのかと思う？思うに...王は姉上に執着しているというより、姉上に流れる聖王の血に執着しておるのだろう。私は亡き父上にその事を何度も進言し続けたが、取り合っただけなかった」

竜になってしまっただけでは帰すのにも帰せないからだろうが、王のアデルへの反応を見るとそれだけでは無いようだ「お妃さまを深く愛しておられるからでしょう」アデルへの横恋慕には苛立つものの、リカルドは素直にそう考え、答えた。

「そんな優等生な回答を求めてはおらんよ。聞いた話によると、最近王は美しい少年にぞっこんになり、側に置いているそうではないか」

隣の国の公子にまでアデルの話は伝わっているのか。醜聞として。さて何と応えたら良いものか。

「少年は私の弟弟子です。確かに王にたいそう気に入られて近衛騎士としてお使いしておりますが、ご懸念されるような関係ではありません」あんな風に突き放しながら...そのくせアデルの貞操を信じようとする自分に対してリカルドは少し嫌な気分になった。

「ほう...気高き聖竜騎士の君のねえ」公の言葉には少しトゲがある。しかし、リカルドは意に介さなかった。

「それがなにか？」

「まあ、君の言葉を信じるとしよう。でなければ姉君が不憫で仕方ない」アドウィンが手を組んでうつむいた時、アゴの線や手指がアデルに似ていると感じて...ますます血のつながりの関連性が強くなるように思えて不安になった。

「ご心配になるのはごもつともです。しかし、今更里帰りされるよりはどちらかの血を引かれた御養子をお迎えになるのが、両国の為にもなり現実的だと思います。そういった話であれば私からも宰相閣下をお願いして進言出来ますが」リカルドは妥当な意見を述べて話題を変えたいと考えていたが...

「私と姉君は、仲の良い姉弟だった...とてもね。幼い頃に、母を無くした私にとっては...母のような存在だった。だから私は姉君とお会いしたいだけなのだ。姉君も故郷に帰りたいたいと思っている」アドウィンの紫の目が妖しく光る。この公子はそこらあたりにいる魔道士よりも術士であるようだった。しかし、これが聖竜騎士を側に呼び寄せた理由なのか...リカルドには疑問だった

。しかし、『姉君を取り戻したい』と言う言い草からして、執着があるのはむしろ弟のアドウィンの方なのではないかと感じた。

「そうですね。王妃さまも...帰りたいと思っらっしゃるはず。故郷に帰れるように尽力をつくします」リカルドは魔法にかかったふりをして応えた。

「よろしい」アドウィンは満足げにうなずいて席をたった。

「本日はもう遅い。我が邸に泊っていくがよろしい...明日からの聖竜騎士として相応の働きを期待しているぞ」

「はっ」リカルドは深々と頭を下げた。

公邸には所々に見張りと出入り禁止の魔法が施されていた。

『まるで...監獄のようだ。この土地柄で竜言魔法ばかりに取り囲まれていたら...いずれ心が崩れて竜になってしまうかもしれないのに』

侍従に案内されて客間に通される途中の通路に、先代のルーシェン公の人々の肖像画が飾ってあった。皆、赤い系統の髪に紫の瞳をしていた。その中でひとときわ若く美しい婦人の肖像画の前で目が釘づけになった。燃えるような赤い髪に赤紫の瞳...

「どうかされましたか？」侍従が振り返った。

「美しい方ですね」リカルドは独り言のようにつぶやいた。

「お若い頃のイリーナ公女さまです」

アデルにそっくりだった。女官が泣き崩れるのも無理はない。リカルドの心が重く沈んだ。

#10 占いの館

竜のもたらす災がどのような事なのか。王の執務室の傍らで、王の武具の手入れをしながら、アデルは差し支えなく誰かに竜の話しを聞けないものかと考えていた。

いくつかの昔話はリカルドから聞いてはいた。しかしそれは、歴史の教養として主旨をかいつまんだ話だったせい、つまらないものだったのでちゃんと聞いていなかった。

専門家に聞いた方が良いかもしれないと思い当たり、アカデミー出身のライナスから教授を教えてもらい、話を聞きに行ったが特に収穫はなかった。歴史の教授は少し考えて、アデルに言った。教授の答えは意外だった...娼家にいる年老いた占い師を尋ねると。彼女らは公式記録にはない伝承の物語に詳しいので、何か手がかりがあるかもしれないと。

そんな訳でアデルは娼家に行きたいとライナスに頼んだ。

「やっと行く気になったか〜」ライナスは喜んでいた。「いやさ、団長から一日も早くお前を男にしてやってくれって頼まれていてさ」

「ああ？」

「お前は王さまの恋人だっていう噂があって」

自分の知らない所でそんな噂が持ち上がっているのかと知り、アデルはぞっとした。

「ソレは違う、断じて違うから。金輪際無いから」

「なんか...そんな否定のされ方されて、王さまが可哀相だな」ライナスは苦笑いした「ほら、お前、女の子みたいに可愛いだろ。他の団員の出来心が心配なんだと。だからお前が女を買うって事であればさ、何人かは自制するだろうって」

「何人かは...って（全部じゃないのね）」リカルドも出来心だったのかもしれないと頭を横切り、アデルはちょっと悲しくなった。しかし、そんなアデルの思いをよそにライナスの目は輝いていた。

「なあ、どんな子いい？」

「実は、年をとった占い師を探していて」

「ええっ。お年寄りが好みなのか？」ライナスの驚きようにアデルの方が驚いてしまった。

「いや、占ってもらっただけだから。心当たりはない？」

「なんだよ〜そのつもりになったとばかり」ライナスはがっかりした。

かなり落胆していたのでアデルはすまないと思い、なんで話にのらないか事情を説明した「ごめん。オレ、好きな人がいて。だからそっとしておいてくれないか？」

ライナスは事情を理解したようだった「そうだったのか。それで占ってもらうんだな。わかった。応援するぜ」

『いや、ちょっと違うけどまあいいか』誤解はあるけど、悪い誤解ではなさそうだったのでアデルは修正しなかった。

暗がりの娼家には沢山の女達がいた...いろんな匂いを消すための更なる匂いが充満していてむせるようだった。

全裸、半裸...しかし美しい娘は服を着ていた。中には自分とそう年の違わぬ少年もいた。

「男の子...」アデルが驚いていると、ライナスが耳元でごによごによつぶやいた「男の子しかない店もあるよ。僕も最初は驚いたさ」さらにライナスは耳元でつぶやいた「オイルとかつけてよく揉み解すんだと...一度味わうともう戻れないらしい。僕は遠慮しとくが」

そうだったのかと、アデルはリカルドとの事を思い起こした。あんなに痛かったのは自分が勉強不足だったのかと思った「...魔法で治療しちゃったよ」しかし、そういう事は年上の彼の方が知っておくべき事じゃないかとも思い、少し腹立たしくも感じた。

「あの奥の店を過ぎたところの小屋だから」ライナスが道の先の奥の暗がりを指差した。

「お前、男の子目当ての奴から間違えて声かけられそうだけど、穏便に対処しろよ。じゃあな」ライナスは手を振って暗がりに消えていった。

見渡すと客を引く女達は一見、陽気に見える。この光のささめ、抜け出す事の出来ない泥沼のような世界でも気丈に生きている。

ギルの弟子になる少し前、こうゆう所に出入りしていた魔道士の親方を探しに来た記憶が蘇る。バースに拾われなかったら、この世界に自分もいたかもしれない。そう思うと、下げずみながらも涎をたらしながら女たちを物色している男たちの姿に虫酸が走った。

ライナスに紹介されたのは...よく当たると評判の老女の占い師だった。

「お若いの。何を占ってほしいのかい」魔力の強い者は、相手の魔力を押し量れる。確かにこの占い師は当たりそうな印象を受けた。

「竜にまつわる古い伝承を何か知っていたら聞かせてください。報酬はお支払いします」

「おお、ここじゃ珍しい紅蓮の瞳じゃないか。お代はいらないからお前さまを占わせておくれ。そしたら知っている話しをするよ」

老女はアデルにカードを切らせて受け取りながら、何を占って欲しいか聞いてきた。

「願いがかなうかどうか」戻せるならリカルドとよりを戻したい。それだけが...アデルの唯一の願いだった。

お香が炊かれた暗がりの中、老女はカードをめくってつぶやいた。

「恋人との離別の相がある」その言葉にアデルはドキリとした。

「だが...縁（えにし）は深く結びついておる。お前は既に願いを叶えておるはずだ」

「そんな事はないです」確かに一時は幸せだった.....けれど。

「ふ〜む。私も腕が落ちたのかね」カードをしまいながら老女が言った。

「そんなに心変わりが心配なら魅了の魔法をお使い」

「オレはその手の魔術を使おうとは思わない（そもそも魔法が通じない相手だし）」

「おやまあもったいない。お前さまほどの魔力なら禁術魔法すら容易く操れるだろうに」抜け落ちた前歯を出して老女は気持ち悪く笑った。

『禁術魔法...究極の竜言魔法か。やれやれ...このおばばは曲者かもしれない』

あの、もう顔すらよく覚えていない魔道士は、一攫千金のために失われた禁術魔法の載っている「禁術書」を探していた。

その魔道士から習った幾つかの竜言魔法を、いたずらに使ったら、リカルドからこっぴどく叱られたものだ。あのウラド王すら竜言魔法を使いすぎたため竜になったと。その時アデルは、もしかしたら、竜言魔法が竜の災いに何かしらの関わりがあるかもしれないと思いたった。

「手間を取らせたな」アデルが席をはずそうとすると「竜の古い伝承話を聞きたいんじゃないのかい？」と引き止められた。老婆は聖王が竜になって空から血の雨を降らせた昔話をしはじめた。

#11 騎士の資格

その夜以来、アデルは普通の村人の格好をして魔道士たちの集まるような酒場に行き、究極の竜言魔法のことを聞いて回った。

ウラル聖国には聖竜の加護を受けた鉱泉や滝が数多くあり、魔道士たちの多くは竜言魔法で穢れてしまった身体を清めに湯治にきていた。魔道士達の多くはルーシェン公国の者たちだった。

そんなに竜言魔法に興味があるなら、弟子にしてやるという魔道士もいた。酒場には魔道士以外にも、商人や吟遊詩人もいたが、ルーシェン公国から来た者たちは「あの土地は豊かで暖かいが、魔法に溢れている。それなのに聖地が殆ど無い。清める事をせず長く暮らすと竜になってしまうかもしれない」そういった事を口々に漏らしていた。

そんな所に単身で出向いているのかと、アデルはリカルドが心配になったが「リカルドは結界を結ぶのが上手い。それに竜言魔法に対して慎重だ。きっと大丈夫」そう自分に言い聞かせた。

しかし、数日経ったある日、その姿を他の団員に見られ、騎士団長の耳に入ってしまった。「この所、なにやら妖しげな場所に入り浸っているそうではないか」ガラント騎士団長は不機嫌だった。

「竜言魔法に興味をもちまして、魔道士達に話を聞いているだけです」アデルは正直に答えた。

「近衛騎士に必要なのは、王に対する忠誠心と剣の腕前だけだ.....今度は魔道士にでもなりたいのか？」ガラントは眉間にシワを寄せた「まあ、お前の剣の腕前は知れているが、魔力は相当なものだ。その方が向いているかもしれない」アデルはうつむいた。

「正直言って、お前がいると他の団員が浮き足立って迷惑なのだ。かといって、王はお前を側におきたいと願っておられるし、聖竜騎士勲員の宰相殿はお前を騎士として取り立てていたいようだからな」ガラントの不機嫌はさらに募っていくようだった。

「お言葉ですが、なぜ魔力は要らないのですか？昔は近衛騎士になるのにも魔力が必要だったと聞いております」アデルは団長の不機嫌など意に介せず自分の疑問をぶつけた。

「中途半端な魔力ほど厄介なものは無いのだ。剣に迷いが出る。そもそも、近衛騎士に竜言魔法はふさわしくない。それでも力を求めるのであればここには置いてはおけん」堪忍袋の緒が切れた音が聞こえるようだった。

「お前も望んでここに来たわけではあるまい。聖竜士騎の道に戻れるように私がバースに話しを付けよう。王のわがままを牽制するのも宰相の仕事だ」ガラントは席を立った。

アデルは一瞬、戻れるかもしれない...と喜んだが。しかし、あの竜の美しい瞳を思い出した。

「オレは...聖竜士騎にはなれません」

「なんだと？」

「団長ならご存知でしょう。聖竜士騎は竜を仕留めるのが勤めです。でもオレには可哀相で出来そうにありません」

アデルは一喝されると覚悟していたが、ガラントは怒りを超えて呆れてしまったようだった。

「なんだ。その言い分は」団長は頭を抱えてため息をついた「男らしくないのは外見だけじゃなかったのか。呆れたぞ」

ガラントは齒に衣着せぬ物言いをする人だとはわかってはいるものの、男らしくないと言われた上に自分の居場所を失ってしまい、アデルは切なくなってしまった。

「修行場に帰りたい。リカルドがいたあの頃の砦跡に」笑ったり、怒ったり、叱られたり、泣いたりしていたのはつい最近までの事だったのに。

騎士団の宿舎で荷物を整理していると、ライナスが様子を見に来た「娼家がよくて酒場がダメな理由がよくわからないな」

「酒場じゃなくて、酒場にいる魔道士に関わる事がダメだったらしい。短い間だったけど、御世話になりました」アデルは自分が授かった赤い騎士団のマントと騎士の証の返却をライナスに託した。

「そうなのか。寂しくなるな...まあ街で見かけたら何時でも声かけてくれよ」

彼は良い兄貴分だった。リカルドともこんな関係でいられたらよかったのにと思いながら、アデルは近衛騎士団の宿舎を後にした。

宰相の執務室に行くと、既に騎士団長から話通っていた。

「まあ、座りなさい。...しかしどうしたものか」バースは頭を抱えていた。執務室の椅子に腰掛けて、アデルはそんなバースの姿を見ていた。

「ガラントはああ見えても部下の面倒見が良くて、どんなくせ者でも上手く配下にしてしまうのだ。その男にさじを投げさせるとはなあ」バースはアデルをちらりと見た。

「お前の育成にはギルもさぞ手を焼いたのだろう。いや、ギルの話しでは、お前はほとんどリカルドの弟子のようだったらしいが」リカルドの名前を聞いて、アデルは胸が締め付けられる思いがした。

「オレが、こんななのはリカルドのせいではありません。この際、王さまの侍従にでも何にでもなります」アデルが勇んで進言すると、

「お前のような将来が有望な若者がそんな事ではいかんよ」と、バースは憂鬱そうに答えた。

「でも...オレが王様の側にいると仕事が捗るのでしょうか？ そんな簡単な事で宰相閣下のご恩に報えるのであれば」

「私の恩など気にせんでいい。才能ある者を見つけるのも私の仕事だったのだから」バースは気を取り直すように微笑んだ。

「団長に魔道士に向いていると言われましたが、いずれにせよ、オレのような意気地なしでは」アデルはうなだれた。すると、お前の事はとりあえず私が預かるから、その間ギルの所に戻っていなさいと言われた。しかし、今は砦跡には帰りたくなかった。

#12 守りたい者

結局アデルはまたあの竜の所に来ていた。

色んな人を困らせて...迷惑をかけてしまった。せめて王が自分に興味がなくなってくれば、王宮から出ていける。でも、出てどこに？ あの砦跡に戻りたいと願っていたけれど...聖竜士騎にならないのならあの修行場にいる理由がない。それに戻ってもリカルドはいない。アデルは竜に話しかけた。

「リカルドに会いたい...会いたいよ。どんなに冷たくされてもいい」竜はつぶらな瞳を瞬きするだけだった。

「バースとギルがお前を探しとったぞ」振り返ると王が立っていた。

「王さま...」

「一度でいいから、『わが君』とか言ってくれんかなあ」

アデルは無言でうつむいた。

「お前が...時々ここに来ている話はニナから聞いておったが。お前のペットのようになってるな」その時、竜がアデルの頭を舐めた「いや、お前が彼女のペットかな。私はお前をペットにしたいが」王が高笑いをした。

「ペットですか...」アデルの顔がこわばったので王は言葉を否定した。

「...あ、いやいや、ペットのように可愛がりたいという意味であって、他意はない」

「オレを抱きたいですか？」アデルは王に詰め寄った。

「なんだいきなり...そりゃまあ。だが、色々と釘を打たれておってなあ。第一、お前自身が」王は面食らったようだった。

「構いません。貴方だって...興味あるのはこの身体だけでしょう？ こんな身体なんか。抱いたらきっと興味がなくなりますよ」そのふてぶてしい物言いに、王は切れてアデルの頬を平手打ちした。

「なにを投げやりになっとる」アデルは打たれた頬を抑えて、うつむいて泣いた。

「お前。誰に何を言われたのだから知れんが...」アデルは嗚咽した「ああ。もうなんだ。これだからガキは手におえん」王はやれやれとした体になった。

「愛していなかったと...身体だけに興味があったから抱いてみたけど、もうどうでもいいって」そう言放った時の、リカルドの冷たい瞳を思い出して...身体が震え、こみあげてくる悲しみで吐きたくなりそうだった。

「なんだと！ お前にそんな事をぬかしおったヤツがおるのか！」王は顔を真っ赤にした「誰だッ！ そいつはっ」王の剣幕に驚いてアデルの涙が止った。

「や、やめてください」アデルは焦った「もういいんです...オレが勝手に好きになっていただけですから」それでも、王の怒りは治まらなかった。

「良くはないッ！」

《《グオー——オン》》

王がどなった時、竜も怒鳴るように鳴いた。二人は驚いて竜を見つめたが...竜は何事もなかったように丸まって寝始めた。シーンと辺りが静まり返った。

「王さまに...なんとかして欲しくて話したんじゃないです」声がまだ震えていた。

「...まさかお前から失恋話を聞かされるとはなあ」王はため息をついた。

「すみません...他に話せる人もいなくて」アデルは少し落ち着きを取り戻した。

「まあ、なんだ。私も大人げなかった」王は少し照れていた。そんな王をアデルは憎めない人だと思った。この人が選ばれて王になった理由が少しわかった気がした。

「ところでお前、なんで竜言魔法なんぞ調べている。大人しく近衛騎士におさまっておれんのか？」

「オレは...彼女を守りたい」アデルは竜に近寄り、首をなでた「竜がもたらす災いが竜言魔法ならば、あらかじめ妨げる方法もあるのではないかと。そうしたら、リカルドが...聖竜騎士が殺さなくてもいい竜を殺さずに済むでしょう？」

「リカルド？ ああ、このあいだルーシェンに送った猛者か。お前の兄弟子だったな」王の言葉にアデルは小さくうなずいた。

「聖竜騎士になるつもりだったお前が、聖竜騎士の使命の一つをなくそうというのか？」

「いいえ。狂ってしまって止めようの無い竜は...どうしようもないと思います」

王は首を横にふった。

「この竜が平静でいられるのは、飢えておらんからだ。だがな、普通は竜になってしまった時点で...周囲に迷惑をかけお荷物になる。災いをもたらすと周囲に思われていた方が殺すには好都合なのだよ。そうは思わないのか？」

その話しに呆然とするアデルに王は続けて話した「竜が災いを招くというのは、おそらく嘘だ。ただ、お前の言う通り、狂ってしまって手の付けられない竜もおるが。大陸人に我々竜人が竜になってしまう事を悟られないために手を打っているだけだ」

「そんな...そんな」アデルは絶句した。

「もっとも、最近は大陸の妙薬のせいで心を壊してしまう者もいるようだが」

アデルは竜の近くにしゃがんだ。つぶらでやさしい赤紫の竜の目が瞬く。アゴや首をなでると、気持ちよさそうに小さな声でグルグル鳴く。

「人と同じ暖かさなんです...むしろ人よりも優しいぐらいだ」

王は、二人の姿をじっと見つめていた。

「魔法でなんとか心を元に戻せたらいいのに...魔法を無かった事にする魔法があったら。そうしたら。そう出来たら...」アデルは竜を抱きしめた。

王は少し考えた「昔...お前と同じような事を考えていた魔道士がおった。だがそいつは途中で道を誤って禁術魔法の力に魅了され、心が壊れて竜になった。私は泣きながらその竜を仕留めた。古くからの友だったからな」

アデルは顔を上げて王を見つめた。王は悲しい表情をしているように思えた。

「お前にその覚悟があるのなら、余の魔道士として、竜言魔法を極めてみろ。聖竜魔法を修め、

騎士を目指して修行してきたお前なら道を切り開く事もできるかもしれん」

「王さま...」

「我が君と言えんのか？」

「はい。我が君」

「よかろう。少しは元気になったようだな。...だがな、失恋の痛手を癒すには新しい恋人を見つけるのが一番だ」王は自分の事を指差したが、アデルは微笑んで首をふって否定した。王ががっかりしたのを見て、やっぱり憎めない人だと思った。

#13 古き騎士の称号

御前会議のために集まった聖竜騎士の代表名が円卓の座席横に立って王を待ちながら話していた。

「王が新しく騎士の位を設けたいと。王の命をうけて竜言魔法を極める騎士という事らしい」一人の代表が皆につぶやいた「や、既に騎士の証を賜った近衛騎士である者が魔道士の魔術を身につけるとい話だが」他の騎士がまた違う見解をしめした。そこに王とバース宰相が連れ立って入室してきた。

「諸君。またせたな」王が皆に手をあげると、一同挨拶をして着席をした。

「大陸人が密かに我がラウド聖国領内に侵入しようとする動きがあるのは、諸君らも懸念する所であろう。彼らの目的は、彼らがこの島に棲息していると考えている竜の捕獲と魔道書の奪取であると思われる。しかるに、大陸人に我々が竜人である事を知られてはならない。そのため我々は、竜に変貌してしまった隣人を聖竜の名のもとに手にかけて来たのであるから」代表らはバースの言葉にうなずいた。

「あらゆる魔道書は複製が数多く存在するが...それらの多くは聖竜魔法によって対峙出来るものである。しかし竜言魔法の中でも特殊な禁術魔法は聖竜魔法では対処できない。それら伝誦の多くは失われているが、禁術書としていくつか存在していると言われている」

「しかし、たとえ魔力のない大陸人がその書を手にしたところで、禁術を使う事は出来ないのでは？」一人の聖竜騎士が意見を述べた。

「いいや、だからこそ魔力みなぎる竜の血を欲しがっているのだ」王が答えた。「我々は、彼らより先に禁術書を手に入れる必要がある。本来ならば、相応の魔力をもつ信頼のおける魔道士に委ねるのが筋であろうが、私はルーシェンに伝わる伝説にある古き騎士の称号を復活させ、我が命に於いて任につけさせたいと考えている」

黒いローブに黒水晶のロケットを身につけたアデルが御前会議の場に呼ばれた。ギルは驚いた。

「ご紹介を賜りましたアデルです。以後お見知り置きを」

「彼は聖竜騎士になるべく修行を積んだ者ですが、王はこの者の魔力を見込まれたのです」バースが紹介した。

「ずいぶんと若い」聖竜騎士たちはざわめいた

「うむ。経験不足を補うために、他の聖竜騎士と行動をともにさせるつもりだ」そう王が補足すると「で、あるのなら異存はありません」一人の聖竜騎士がうなずいた。

「私は反対です」ギルは立ち上がり、異議を唱えた「竜言魔法はウラド王すら竜にしてしまった。禁術書を扱っていたら、彼も竜になってしまう可能性があります」会議は騒然とした。

「王よ。会議に出席の皆々...どうか、しばしこの者と二人きりで話をさせていただけないでしょうか」ギルは王に懇願した。

「よかろう」王がうなずき、議会は少々中断した。

「どういう事だ？ 私に何の相談もなく。なんでこのような事に？」ギルはアデルの両肩に手を置いた。

「申し訳ありません。昨晚王と話して決ってしまいました」アデルはうつむいて師匠に詫びた。「昨晚って...お前また王と一緒にあったのか？」ギルが真顔で問い詰めるので、「あ、いや、王さまとはそういう関係ではありませんから」アデルは両手をふって全否定した。

ギルは肩を落とした「...やる気のある若者を撓ててその気にさせる、あの方の術中に嵌ったか」ギルは残念そうに首を横に振った。

「アデル。リカルドがどれほどお前の事を思って行動しているのか、お前には判らんだろうが...あいつはお前のために竜を殺して回ったのだぞ」

アデルは自分の耳を疑った「何故です？ オレはリカルドに竜を殺して欲しくないのに?...」

二人の間に沈黙が流れる。

「いずれ時期が来たら私から理由を話そう。しかし...この期に及んで王もお前も引き下がるわけにはいくまい」ギルは頭を抱えた。

「覚悟の上です。その時はお願いします」アデルの言葉にギルは反論をする元気を無くした。

「覚悟だとお？ 何を言っている。どうあっても...竜にはなるなよ」

二人が議会に戻ってきた。

「話はずきました。しかしながらこの者の師匠として私は異議を唱えますが...議会の決定には従います」ギルは皆に頭を下げた。

「では、他に異議はないものとするがよろしいかな」バースは会議を続行した。

アデルはバース宰相の執務室の窓からギルが帰っていく後ろ姿を見ていた。

「ギルから異議が出るのは想定内だったが」バースは続けた「しかし...お前を側に置くとわがままを言い続けた王をどうやって説き伏せた？」

「説き伏せる？」アデルは意外だという顔をした。

「お前は王直属の騎士として、宮中にも国外にも自由に出入りできる権限をもったこの国で唯一の魔道士だ。滅多な事では就けぬ役目だぞ」そうだったのか。今更ながらアデルは自分が置かれた立場を少し理解した。

「失恋話をしました」

「失恋話だと〜」バースは面をくらっているようだった。

「その後、竜言魔法の話をしたら...王さまのかつての友の魔道士と考えが似ていると言われたのです。そうしたら、竜言魔法を極めてみないかと」バースはじっとアデルを見つめた。

「ライオネルの事だな。なるほど...王の一番の親友だった方だ。確かにお前の魔力は彼を彷彿とさせるところがある」

「え？ その人は竜になってしまっって手にかけてと...そうだったのか」だから、悲しそうな顔をしていたのだ。アデルは王を少し気の毒に思った。

「これから竜言魔法の修行をするのに、どこかにあてはあるのか？」アデルは首を横にふった。

「私もギルと同じ心配をしている。しかし、身近にお前を正しき道に導く者がおれば、同じ轍は

踏むまい。と、言うか...まあ、お前を上手く扱える者がおればなあ...」バースは何を思いついて手を叩いた。

「そうだ。お前に任命書を用意しよう」

#14 魔道騎士

ルーシェンの小さな古びた教会跡で、リカルドが埃にまみれて掃除をしていると聞き慣れた声
がした。

「なんで、こんなボロっつい所を宿舎に選んだのさ。砦跡より酷いじゃないか」あまりにその声
に聞き慣れていたので、リカルドは普通に受け答えしてしまった。

「仕方ないだろ。この国はあっちもこっちも竜言魔法だらけで、ここ以外に聖竜の加護をうけ...
なんでお前がここにいる？」

突然の事態にリカルドは驚きを隠せなかった。振り返るとアデルが、黒いローブのフードから
顔を出した。

炎のように赤い髪、いたずらに光る美しい紅蓮の瞳、生意気な唇。リカルドは嬉しくて抱きし
めたい気持ちをぐっと抑えようと目をそらし、冷たく言い放った。

「なんだ、その魔道士のような格好は。近衛騎士だろ？持ち場に戻れ。お前の翼なら、日が沈む
前には戻れる」

「近衛騎士をクビになった」

「嘘付くな。この間なったばかりだろう」リカルドはずっと顔を背けたままだった。

「でも...本当だよ」アデルは少し困ったように答えた。そんなアデルにイラついて、ついつい言
葉が荒くなる。

「いいから帰れ。目障りだ」

しかしアデルは後に引かなかった。

「...なんでオレのために二十頭も竜を殺し回ったのさ」リカルドはアデルの言葉にたじろいだ「
リカルドが、どんなにオレの事思ってくれているかって、ギルが教えてくれた。嬉しいのに喜べ
なくて複雑な気分だよ」

「...ギル」リカルドは頭を抱えた「とにかく、お前はここにいちゃいけない。簀巻きにしてでも
送りかえすぞ！」

「王命でも？」アデルはバースから拝領した手紙を広げて読み出した。

「王のご命令により、この者に竜言魔法の習得、禁術書収集、および聖竜騎士リカルドの任務を
補佐する事を命ずる。ウラル聖竜王国第六十五代宰相.....」

「見せろ」リカルドは手紙を横取りした「本物の任命書だ。...一体どうしてこうなった？」困惑
顔のリカルドをよそにアデルは微笑んだ。

「聖竜騎士リカルド殿。私事、魔道騎士アデル、本日付けで貴殿の部下になりました。なにとぞ
今後ともよろしくお願い致します」

魔道騎士アデル

<http://p.booklog.jp/book/41232>

著者 : tenuto

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tenuto/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41232>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41232>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.